

江戸期の旅行記録に見られる相撲体験について

—モンターヌス，ケンペル，シーボルトを例に—

小林 将輝

1. はじめに

マス・ツーリズムの時代が叫ばれて久しく、日本においては近年では国の政策の一環として訪日外国人の増加を促し、その結果、来日する外国人観光客がますます増加している状況にある。日本を訪れる外国人観光客の目的、関心は多様であるが、近年のツーリズムの領域の一つとして「スポーツ」が急速に注目されつつあると言えるだろう¹⁾。とりわけ2020年に東京オリンピックを控えている現在において、ツーリズムとスポーツという関係は、経済や産業的な観点、あるいは政治的な面だけではなく、スポーツを通じての国際交流や異文化理解という文化的な側面においても関心が向けられるようになった。異国から日本を訪れ、アスリートやプレイヤーとしてスポーツ競技に参加する、チームスタッフや大会スタッフとして団体や運営に関わる、そして単なる一観客、旅行者としてスポーツを観戦、体験するといった様々な経験を通じて、「ツーリスト」たちは日本という国についての直接的な経験を得て、日本のある側面について知るのである。グローバル化の波はスポーツの世界にも及んでいるが²⁾、現代ではますますこのようなスポーツを通じての異文化との接触の機会は増えていると言えるだろう。

筆者は近年のこのような状況から、現代の私たちが「スポーツを通じて世界を見る」ようになっていることを指摘した。そして過去に目を向けてみても、スポーツを通じて、そのスポーツが根付いている国のことを眺めるといふ同様の事態があったことにも言及した³⁾。江戸期や開国前後、明治期などに日本を訪れた西洋人たちは、相撲、柔術、剣術、弓術といった日本で独自に発展した、伝統的な身体競技や武芸、芸芸など、いわば「伝

統スポーツ」⁴⁾を初めて直接目の当たりにして、その接触した体験を語ってきた。これは上述したマス・ツーリズム化のなかでスポーツのグローバル化が生じている現代と比すれば、確かにその規模は小さいと言えるものの、江戸期の長い鎖国を経て、日本自体がまだ外国に十分知られていない時代にあっては、その驚きや関心の程度は、現代よりも大きいものだったと言えるはずである。

江戸期においては、幕府の長い鎖国政策によって、外国にもたらされる日本についての情報が制限され、結果として、日本の特異性を示すような「エキゾチックな」事物、文化、風習などの様々な事柄が西洋人の関心の的になった。そのような対象の中で、日本の伝統スポーツも同様に西洋人の関心をひき、エキゾチズムを呼び起こしたと言えるだろう。とりわけ巨漢の男たちがほぼ何も身につけないで激しく格闘をする相撲は、目をひきやすく、わかりやすい異国の指標であった。それゆえ日本について語る西洋人たちのお気に入りの話題の一つであったと言えるだろう。明治期に日本を訪れたバジル・ホール・チェンバレンが「相撲取は日本で見かける最も特徴的なものの一つとして挙げなければならない」⁵⁾と述べたように、相撲は西洋人のエキゾチズムを強く刺激するものであったのである。

それでは、この相撲に接した西洋人たちの体験はどのようなものだったのだろうか。そして、彼らはその体験をどのように受け止め、どのような表現を与えたのだろうか。

本論は西洋人が相撲に接した体験について注目をする。そしてその体験について報告した記録がある場合、その記録を取り上げ、その体験がどのように表現がされているのかということ进行分析す

ることを主眼としている。西洋人が相撲について書いた記録は数多くあり、特に鎖国が終わり西洋人が多く来日した幕末、明治期には目立っているが、本論においてはその分析の手始めとして、全体の記録の中で最初期のものをいくつか取り上げたい。具体的には日本では江戸初期にあたる時代に相撲について書いたモンターヌス、同じく江戸初期に実際に日本を訪れ、その報告がその後の西洋世界に大きな影響を与えたケンペル、そして江戸後期ではあるものの、まだ鎖国であった時代に来日し、ケンペル同様日本通として、その後の西洋社会の日本像を決定づけたシーボルトの3者を取り上げ、彼らの相撲体験について分析、検討するものである。

2. 江戸時代の相撲の様相と外国語表記

(1) 江戸期の相撲について

開国前の江戸期に日本を訪れた外国人には、長崎での通商を通じて関わった清国とオランダの商人たち、そしてケンペルやシーボルトのようにオランダ人商人たちに同行したヨーロッパの人々、通商使節、加えて通信使を通じて修交した李氏朝鮮の人々などがいる⁶⁾。本論ではなかでもモンターヌス、ケンペル、シーボルトの3者の相撲と接した体験について取り上げる。しかしそれらにふれる前に、先に、江戸期の相撲の状況について簡単に述べておく。また、彼らが「相撲」にあてた用語についても確認しておきたい。

現代において日本相撲協会主催のもとプロの力士たちが興業として行っているのが「大相撲」であるが、そのもとになるのが「相撲」である。相撲の歴史や文化については、新田一郎や土屋喜敬が詳しくまとめているので、以下、それを参考にしておきたい⁷⁾。

格闘が原義である「相撲」は、古来より日本各地で様々な形で行われていたが、日本が国家として成立していく歩みとともに、相撲も次第に現代のスタイルに統一されていった。古くは農耕儀礼として、水の神をめぐる神事として各地で行われていたが、平安期になると天皇が相撲を観覧し、宴を催す

「相撲節」^{すまいのせち}が、宮廷の儀礼的年中行事として定着する。「相撲人」と呼ばれる相撲を披露することを生業にする人々によるこの行事は12世紀まで続くが、新田は、格闘競技として多様性を持っていた各地の相撲が、この年中行事を通して「同一性をもった」ひとつの相撲に至る契機となったと見なしている⁸⁾。鎌倉時代になると、京のみならず各地村落においても寺社における奉納相撲として相撲は行われた。他方、武家も流鏝馬や競馬などと同様に相撲を好み、上覧相撲なども行われ、相撲への関心は高かった。また、中世においては寺社、橋梁等の造営、修繕のための寄進を目的とした種々の勧進興行が広まったが、相撲も同様に勧進興行として行われるようになった。寄進を目的とした本来の勧進興行はすでに15世紀前半には現れたというが⁹⁾、江戸時代初めになると、営利目的の勧進相撲興行となっていく。これは現代の大相撲に接続するもので、「相撲取」もしくは「力士」と呼ばれる職業的相撲集団が形成され、興行としての運営が組織化されていくことになった。勧進相撲興行は風紀上の問題から禁止令が出されることもあり、一時断続的に中断したこともあったが、18世紀になると京、大阪、江戸の三都において定期的な開催され、発展していく。勧進興行が行われる一方で、庶民における相撲人気も高まり、街中での辻相撲、野相撲なども盛んに行われた。

(2) 相撲を表す外国語表記について

本論で取り扱うモンターヌス、ケンペル、シーボルトの3者の資料において見られる相撲や相撲に関連する用語を以下にまとめる。

まずオランダ人であるモンターヌスは、相撲に対してオランダ語の“Worstelen”，すなわち「格闘」、「レスリング」を意味する名詞をあてている。相撲取については“Worstelaers”というように「格闘者」「レスラー」の意味を表す名詞を用いている。ドイツ人であるケンペルについては、ケンペルに関する図版資料の中で“japanische Ringer”，すなわち「日本の格闘家」という表現が見いだせる。また同じくドイツ人であるシーボルトは、その著作において、相撲に対して「格闘技」を意味する

“Ringkämpfe”をあてている。また、相撲取についてはそれを名詞化をし、やはり「格闘家」を意味する“Ringkämpfer”を用いているが、同じような意味の“Ringer”という表現も用いているの確認ができる。また日本の表記そのままの“Sumo”という用語も用いている。

本論では3者の資料にあるこれらの用語に基本的に注目をしていくことになる。

3. 江戸期における西洋人の相撲体験

(1) モンターヌスが描いた相撲

相撲が盛んに行われていた江戸期の状況において、来日した西洋人たちは、それにどのように接したのだろうか。以下、17世紀のオランダ商人たちの記録に見られる「相撲」やスポーツの記述に注目していきたい。フレデリック・クレインスがこの時代に日本について書いたオランダ人たちの記録を詳しくまとめているので、主としてそれを参考にしながら論を進めていく¹⁰⁾。

日本と最も早い時代に接触したのはポルトガル人たちだったが、彼らのうち、卓越した言語能力を持ったイエズス会士たちは1603年に日葡辞典を出している。これには“Sumo”の項目が見られ、この言葉が闘技、格闘の意味であると説明され、「相撲を取る」という文例が示されている¹¹⁾。ポルトガル人たちに続いて来日したオランダ人商人たちは、日本に来るにあたって、当初はヤン・ハイヘン・ファン・リンスホーテン（Jan Huyghen van Linschoten, 1563 - 1611）の『東方案内記』を情報源としていた¹²⁾。1583年より5年間ゴアに滞在したリンスホーテンは、日本を訪問することはなかったが、ゴア滞在中及び帰国の折りに聞き知った日本について、『東方案内記』に1章を割いて記録を載せている。しかし、そこには相撲に関する記述は見られない¹³⁾。リンスホーテン以後、よく参照された日本についての記録にカロンの著作がある。1619年に平戸のオランダ商館に赴任し、1638年には商館長に昇進し、通算22年にも渡って日本に滞在したフランソワ・カロン（François Caron, 1600 - 1673）は、その滞在の経験に基

づいた記録、通称『日本大王国志』において、日本にかんする詳細な記録を残した。この報告は、ヨーロッパ人たちによく読まれ、ケンペルの報告が出るまでは、日本についての基本書であった¹⁴⁾。これはリンスホーテンよりもかなり詳しい日本の報告であるが、これにも「相撲」に関する記述は見られない¹⁵⁾。

この時期の西洋人によって書かれた相撲についての記録では、モンターヌスが書いたものがあり、これはかなりボリュームがあるものとなっている。職業作家であったアルノルドゥス・モンターヌス（Arnoldus Montanus, 1625 - 1683）は、自身は日本に訪れたことは無かったものの、出版者より依頼を受けて1669年に『東インド会社遣日使節紀行』（以下、『遣日使節紀行』）を著した¹⁶⁾。これは、モンターヌスが独自に入手したオランダ使節団の日記、イエズス会士の書簡集、そして、それまでヨーロッパで出たリンスホーテンなどの日本についての多くの情報を巧みにまとめたもので、「当時のヨーロッパにおける日本情報を網羅的に集約した初めての本格的な『日本誌』¹⁷⁾」と言えるものであった。

『遣日使節紀行』は2部からなり、4つのオランダ遣日使節団の報告と、1つの報告が含まれている。そして、「相撲」という言葉は、1649年から1650年に江戸を訪れた遣日使節団大使アンドレウス・フリシウスの記録の中に見られる。「日本の相撲取（Worstelaers / Wrestlers）の記述」という小見出しがつけられた段落は以下のように始まる。

しかし、彼らの宗教に属するこれらの奇妙な習慣と並んで、日本人はいくつかの身体運動も有している。それらの中では、相撲（Worstelen / Wrestling）が賤しいものではない。彼らが相撲を取る場所は、四角の柵で囲まれ、その周りに観客が立ち、それを眺める。柵は彼らの腰のあたりまでに達する。塚の上、四つの柱で支えられた四角の屋根の下に、その競技場の審判が座を占める。相撲取（Worstelaers / Wrestlers）は、帽子の形につくられた網の下に髪を収め、これを引き

紋り、頭頂に固定する。そこからは、小さな紐が背中まで垂れる。彼らの体の腰から上は、まったく裸で、わき腹と背中にだけ銅の板をつける。その板の上には皇帝の紋章が彫られていて、胸の部分は空いており、腰のあたりにある二つの綱でとめられている。板のようなものを、彼らはまた脛に結わえている。ズボン、その板に結わえつけられた二つのひもで足の間で上に持ち上げられている。このように装具をつけて、彼らは非常にひたむきに相手の上のしかかる。相手を投げると審判がいる塚に行き、銀あるいは金の板を受け取るが、それに皇帝の紋章が描かれていることもある。無い時もある。¹⁹⁾ [半角カッコで示した原文表記は全て筆者による。以下、全て同じ。]

引用中に示したように「相撲」と訳出した原文の名詞は、オランダ語版では“Worstelen”であり、英語版では“Wrestling”となっている。「相撲取」は“Worstelaers”並びに“Wrestlers”である。従って、“Sumo”という固有名詞が用いられているわけではないが、ここでは人と人が取り組み合う一般的な「格闘」という意味での「相撲」であると同時に、内容を見るに、日本特有の「相撲」を指していることが明らかであることから、「相撲」という訳語をあてている。

さて、この段落に書かれている内容を見てみると、ここでは相撲が行われる競技場と観客、相撲取の頭髪と装い、そしてごく簡単な競技の様子と、勝利した場合の褒賞について書かれている。なかでも著者の関心は、相撲取の頭髪と装いに向けられていると言えるだろう。

頭髪について書かれている内容は、おそらく丁髷のことを指していると考えられるが、綱でまとめられ、辮髪のように後ろに紙を垂らしていると説明されるように、正確ではなく、奇妙な描写になっている。

また、おそらく現代で言うまわしのことを説明した、腰回りの様子も不可思議な説明になっている。「皇帝の紋章」が装飾されていることから、それは飾りがついているものだとことがわか

る。江戸時代以前は相撲取が身につけるものは、下帯、つまり褌であった。これが17世紀後半にはまわしという名称が広がっていくようになる。江戸時代前半ではこのまわしの前をエプロンのように前に垂らし、そこに模様が書かれた場合があった¹⁹⁾。まわしの股間を覆う縦の部分、いわゆる「前立褌」は、紐二本で結わえられたズボンとして表現されている。2対の紐は「さがり」と呼ばれるまわしの前に垂らす幾本もの紐を指しているようにも思えるが、さがりは化粧まわしの独立とともに成立したと言われ²⁰⁾、その両者が別れた時期は18世紀半ば以降であることから、このモンターヌスの説明は少なくともさがりをさしているものではないと考えられる。モンターヌスはまわしの帯状の布を紐と取り違え、まわしそのものが股間を隠すとは想像できなかったのかもしれない。

土俵は描かれていないが、どうも「塚」が土俵を指しているように思われる。その塚の上にある4本の柱に支えられた檜のような建物の下に審判がいるという。この部分については、確かに相撲の行司は「屋形」と呼ばれる四本柱に支えられる屋根の下で勝負を見守るので間違ったことは書いていない。間違っているのは、力士がその同じ建物の下にいないことである。これらの描写だけではどのようなものを想定しているのかわかりづらいが、原書に付された挿絵を見ると、モンターヌスが具体的にどのようなイメージを持っていたのかがわかる(図1)。

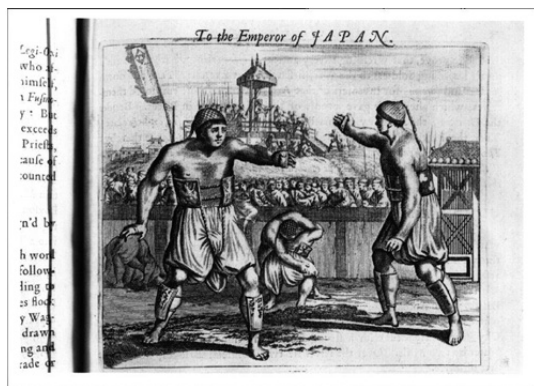


図1 モンターヌス『東インド会社遣日使節紀行』挿絵(国際日本文化研究センター所蔵)

このような不正確さは、モンターヌスが相撲を実際に見ていないことに起因している。モンターヌスは入手したフリシウス一行の記録等をもとに²¹⁾、日本式格闘（Worstelen）を想像して文章をつくり、挿絵もつくらせたのである。本書の他の挿絵と同様に、本書に頻繁に見られるこのような日本描写の不正確さやある種の奇抜さは、日本のことがまだ詳しく知られていない時代に成立した、西洋人による過度のエキゾチズムの表出と見なすことができるだろう。このような奇抜さは、現代の読者さえも関心を示すものであろうが²²⁾、しかしながら、クレインスが本書に掲載された京都の風景画に堀川や御所、二条城が描かれているのを念頭にして、図版には「ある程度の正確さがあるのに驚かされる」²³⁾と述べるように、一定の写実性もあるのもまた事実ではないだろうか。上で見たように、モンターヌスの相撲の描写からは、頭髮の描写が丁髷であり、腰回りの装具の描写がまわしを説明しようとしていること、あるいは行事が占める屋形の下の方の位置のことなども、少なくとも推測できるのである。書かれた報告のみから異国の格闘競技を想像し、文章をつくり、挿絵を作成したということを考えるならば、この描写の不正確さは納得できるものである。

付け加えて言うならば、モンターヌスは相撲の説明を通じて、確かにそのエキゾチックな様子を表現しているが、それを特に強調しようとしたわけではない。上に続く引用を見るとわかるように、日本の相撲の説明を出発点にして、各国にある同様の格闘競技へ目を向け、議論を展開していくのである。

日本人がこれらの運動において、かつてギリシア人やローマ人が、運動によって彼らを戦争における熟練者にし、身体を労働に順応させようとしたのと同じ意図を持っているということは疑いえないだろう。というのは、ヒエロニムス・メルクリアリスはヒポクラテスを引用して、相撲は肉、臍、筋を温め、強くすると述べているからである。テオドルス・プリシアヌスはこの運動を、冷たい

悪い胃に対して良いとも判断している。そしてオリバシウスはそれを水腫に対する卓越した治療法だと評価している。他の医者（その反対に）同じくらいそれに反対しているが、特にそれが熱心になされた場合にそうであるとしている。しかし古代の知恵と習慣は、彼らの比較的新しい、個別になされた意見よりはは価値があると言えるだろう。²⁴⁾

ここでは、日本人が相撲をするのは、ギリシア、ローマと同じように、戦争に向けた体づくりをするためであるということが述べられ、また、これを行うことで、身体の種類機能や症状を良くしたり、回復させたりするなど、治療にもつなげようとしていることが語られているのが見て取れる。つまり、ここで述べられる「相撲」という言葉は、日本固有の相撲ではなく、他の民族で様々な形で行われている「相撲的競技」の意味で用いられている。前の引用で見たように、日本の固有の「相撲」は、奇妙な説明が与えられたことで新奇な競技として提示されているように見えるが、ここで見られるように、その後の部分では、相撲は西洋世界に共通してある格闘競技として、その意義や効能が語られることになる。相撲は他の民族の同種の競技文化と同列に語られることで、相対化され、日本の相撲の特殊性は薄められているような印象を与えるのである。

相撲について語る部分は、もう一段落続くが、そこでは相撲的競技にまつわるエピソードとしてアテナイの王テセウスが相撲を軍事訓練に使用したことや、始祖ヤコブが神と相撲を取ったエピソードが語られるのだが²⁵⁾、日本の相撲の特殊性は、いつそう視界に入っていないように見える。ここでモンターヌスが書こうとしているのは、相撲のような格闘競技を奨励することの軍事的、歴史的、社会的な意義ということなのではないだろうか。従って、日本の相撲の話題をきっかけにして、この種の格闘競技それ自体の普遍的な意義を語っているといえるだろう。

加えて言えば、日本の相撲について語るモンターヌスは、その異国の風習に対し驚きやショック

などは無く、対象と心理的な距離を保っているように思える。これはもちろん、モンターヌスが実際に相撲を見ていなかったことが原因であろう。そして、相撲の描写にかんして言えば、そこに見られるのは、エキゾチズムを強調することが意図されたものというより、実物を見ることなく、伝聞の情報だけで異国の事物を再現しようとする努力の結果であるように見える。そして、それを描写する努力だけでなく、相撲の競技が持つ意義や効能ということに一般化された関心へと話題が広がられているということが言えるだろう。

なお、モンターヌスの『遣日使節紀行』には、この相撲の項目以外にも、本文中に相撲という言葉が出て来るところがいくつか見られる。例えば、16世紀末、文禄の時代に太閤秀吉に秀頼が生まれたことで、関白秀次と次第に不仲になっていったことを説明する中で、秀吉が秀次が主催する祝宴への招待に応じなかったため、秀次が聚楽第に怒って帰り、そこで「踊り、剣術、相撲（Wrestling）、弓術、練兵といったことで有名なあらゆる者を招待して、多くの時間をスポーツや運動を見るのに費やし、勝利者にはかなりの褒美や報酬を取らせた」²⁶⁾と説明される。本書においては、このように史実を語る中で、相撲という表現が出る場合もあるということを追記しておきたい。

(2) ケンペルが体験した相撲

江戸期に日本を訪れた西洋人の初期の記録の中でケンペルの記録ほど、その日本滞在の記録が多く読まれ、西洋人の日本人観に大きな影響を与えた人物はいないだろう。ドイツ人医師エンゲルベルト・ケンプファー（Engelbert Kaempfer, 1651 - 1716）、通称ケンペルは、オランダ東インド会社の商館付き医師として、1690年に長崎に到着した。そしておよそ2年間日本に滞在し、その間に精力的に日本にかんする情報を集め、日本の地理、気候、動植物相、歴史、江戸参府の折りの各種見聞といった一般情報に加え、ケンペルの専門である医学に関わる鍼灸、植物のコレクション

ン、そして日本地図など膨大な記録を残し、その後の世代に日本についての重要な情報をもたらした。そうしてケンペルの残した記録は、研究者のみならず、一般の読者に対しても決定的ともいえる日本観を与えることになる。

ケンペルは帰国後の1712年に、外国滞在の経験の一部を『廻国奇観』という著作にまとめて出版した²⁷⁾。その後、『今日の日本』（Heutiges Japan）という大部の著作を出版する予定であったが、生前にはそれはかなわなかった。残された遺品に関心を持ったイギリスのハンス・スローン卿は、それを購入し、ヨハン・カスパール・ショイヒツァー（Johann Caspar Scheuchzer, 1702 - 1729）に英訳をさせた。このショイヒツァーの英訳は『日本誌』（The History of Japan）として1727年に出版される²⁸⁾。その後、ドイツではクリスティアン・ヴィルヘルム・ドーム（Christian Wilhelm Dohm, 1751 - 1820）が、ケンペルの姪の遺品の中に二つの原稿を見つけ、それからドイツ語版を2巻本にしてそれぞれ1777年、1779年に出版した²⁹⁾。ショイヒツァーによる英語版は、ケンペルの手稿を解説するさいに誤訳が生じたうえ、あやまった解釈が入り込み、また、章立ての中の不足部分がショイヒツァーによって独自に補われるなど、ケンペルの手稿に忠実ではないものであった³⁰⁾。また、ドームのドイツ語版はこのショイヒツァーがケンペルの手稿から作成した写しに基づいており、同様に手稿に忠実ではない³¹⁾。こうした状況の中、2001年になって大英図書館にあるケンペルの手稿を用い、注釈を付した校訂版（Kritische Ausgabe）が『今日の日本』というタイトルで出版された³²⁾。現在のケンペル研究では基本的にはこの校訂版が用いられている。

さて、その『今日の日本』で確認してみると、日本の伝統的身体競技にかんするものとして、祭りの日に行われる手漕ぎ船による競争について言及がされていることや³³⁾、京都で見学した三十三間堂で、1日で数千もの矢を射た者がいたという記録について言及がされているのが確認できる³⁴⁾。

「相撲」とも訳すことができる“Ringen”に関する表現は見られるが、それは長崎の役人について触れた箇所、悪人を捕え、刑を執行する「町使の者」と呼ばれる下級役人たちが、「格闘術に熟達している（in der ringe Kunst geübt）」という言い方においてである³⁵⁾。つまりここでは“ringe”は日本固有の「相撲」ではなく、一般的な「格闘」の意味で用いられている。

現在は大英図書館に収められているスローンによるケンペルコレクションの中には、追加原稿（Additional Manuscripts）と呼ばれるグループに属する一連のコレクションがある。ゲルハルト・ボンによる1979年の報告によると、その中に5232番の番号が振られた、通常の二つ折り判の本よりもさらに大きいサイズの資料がある³⁶⁾。これは236のスケッチからなっているが、この資料の説明として、「エンゲルベルト・ケンプファー博士の自身の手によって描かれ、モスクワ大公国、ペルシア、東インドの旅行において収集されたオリジナルスケッチ」³⁷⁾とある。そして、このスケッチの中身がリスト化されているが、それを見ると、神社、ペルシア人、ヨガの修行といった表記と並んで「日本の相撲取」（japanische Ringer）という表記が確認できる。「日本の格闘家」とも訳せるが、上で見たように、モンターヌスなども「相撲取」という言葉に対して、オランダ語で「格闘家」を意味する“Worstelaer”を用いていることから、これも相撲取を指すのが自然に思われる。そうすると、ケンペルが日本滞在中に描いたスケッチの中、もしくは収集した資料の中に、相撲取を描いたものがあった可能性があることになる。

しかしその後の研究では、この5232番資料はジョイヒツァーが英語版『日本誌』に掲載する図版資料のために作成した下絵だと見なされるようになった³⁸⁾。ケンペルは『今日の日本』を構想するにあたって、自身のスケッチをもとにした60ほどの図版を『今日の日本』に掲載しようと考えていた³⁹⁾。ジョイヒツァーは、スローンを通じてこれらのスケッチを入手して英語版を作成した時、ケ

ンペル自身のスケッチやケンペルが日本から持ち帰った資料を利用して、掲載する図版を増やしたうえ、新たに独自の銅版面をつくらせた⁴⁰⁾。スローンコレクションでは、ケンペルの手稿はケンペルによるスケッチなども含めてすべて3060番という資料にまとめられ、現在はこれを校訂版で確認することができる。それを見る限りでは、相撲取らしき絵は少なくとも存在しないように思われる⁴¹⁾。そうするとジョイヒツァーの「下絵」は、ケンペルが持ち帰った図版資料から作らせたものだと仮定できる。

この仮定のもとでは、ケンペル自身が日本で相撲を実際に見たのかどうかは判然としないことになる。しかし、筆者はケンペルが相撲を見た可能性は十分あるのではないかと推測している。江戸時代前期に制作された、元禄年間の長崎諏訪神社の諏訪祭り「長崎くんち」の様子を描いた八曲一双の屏風「諏訪祭礼図屏風」には、左の半双に土俵に力士たちが並び、観客がそれを見ている様子が描かれている。おそらく祭りの行事の一つとして奉納相撲が行われていたのだと思われるが、この右側の半双には、奉納踊りを観覧席から見る招待客として、中国人商人たちと共に、正装したオランダ人商人たちがマス席にいる姿が見られるのである⁴²⁾。出島のオランダ人商人たちは幕府に行動を厳しく制限され、出島から出ることを禁じられていたが、江戸参府する場合に加え、長崎で行われる特定の祭りには、監視つきで見学することは許されていた⁴³⁾。そしてケンペルも実際その祭りを見学し、かなり詳しく祭りの様子を記録している⁴⁴⁾。そこには相撲についての記述はないが、この屏風絵に見られるように、ケンペルもオランダ人商人たちと一緒に奉納相撲も見た可能性は十分あると言えるだろう。その他にも、先に見たように、江戸参府をしたオランダ人一行の慣習として、ケンペルも京都で観光のための自由時間を認められている。そのさいにそこで勧進相撲興行を見た可能性はあるだろう。また、ケンペルはそもそも日本に来る前の時点で、日本に三度の駐在をし、当時はオランダ東インド会社の総督で

あったヨハネス・カンブスハウスを通じて、オランダ人商人たちの記録に接触し、日本のあらゆる情報に通じていた。また、帰国のさいにもこのカンブスハウスから、カンブスハウス自身が収集した貴重な資料を受け取っている⁴⁵⁾。その事実からも、ケンペルが仮に直接に相撲を見るのが無かったとしても、間接的に日本の相撲文化について十分な情報を得ていた可能性は非常に高いと言えるだろう。

(3) シーボルトが見た相撲

ドイツ、ビュルツブルク出身のフィリップ・フランツ・フォン・バルタザール・シーボルト (Philipp Franz von Balthasar Siebold, 1796 - 1866) は、出島の商館付き医師として1823年から、禁制品を海外に持ち出そうとしたことが発覚した所謂「シーボルト事件」で追放される1830年1月1日までの長い期間に渡って日本に滞在した。ケンペルと比べると滞在期間も長い、日本人女性と結婚し、鳴滝で私塾を開くなど滞在中の自由度も高く、日本に対してはとりわけ医学の発展に貢献する一方で、西洋世界に対しては、植物学、博物学などの自然科学分野、日本の各種地図などの地理学、そして浮世絵など民族学関係の膨大な資料を収集し⁴⁶⁾、またその著作によって西洋人の日本人観へ極めて大きな影響を与えた。

シーボルトが残した記録や資料、そしてシーボルト周辺の記録を見てみると、相撲という言葉や図像が出て来る資料はいくつかある。その中の一つに、例えばシーボルトの高弟であった高良斎の資料がある。それは高良斎に対してシーボルトが日本人の生理学上の特徴について質問し、それに答えた内容を示す記録、通称「高良斎稿 生理問答」である。この問答の中の6番目に「日本に於いて何州の人が相撲取の如く最も丈高く候哉」⁴⁷⁾という質問が見られる。このことから、シーボルトが日本人の「丈高」い人の例として、相撲取の体格を念頭においていることを見ることができる。

他の関連資料として、シーボルトの日本滞在中のお抱え絵師であった川原慶賀の残した資料を挙

げることができる。川原慶賀はシーボルト一行の江戸参府にも同行し、道すがら日本の様子を描いた。その中で人物画をまとめた画帳『人物画帳』には、109態の様々な人物画が含まれているが、その中に「長羽織を着た力士」と「化粧回しの力士」という2人の相撲取が描かれているのを見ることができる⁴⁸⁾。

次にシーボルトの著作『日本』における相撲に関連する用語に注目してみたい。シーボルトは日本滞在の成果を大著『日本』(Nippon)において著した。これはシーボルトの帰国から2年たった1832年より分冊の形で発行されたもので、20分冊が13回に分けて配本され、最後の配本は20年後の1851年であったとされるが、実際は13回配本後も一部の内容が配本され、それは1858年、もしくは59年頃まで続いた⁴⁹⁾。『日本』は本文第1章から第7章までと、図版367枚からなり、シーボルトによる自費出版のかたちで発行された。予約購読者を募り、発行部数は当初は300部ほど、最後の配本の時には60部ほどだったと言われている⁵⁰⁾。この初版が出た後、1897年にシーボルトの息子アレクサンダーとハインリヒが編纂し、縮刷本として一部省略、一部追補した第2版が出た(以下、第2版と略す)⁵¹⁾。また、1930年と31年にベルリンの日本学会からF・M・トラウトが監修し、増補された第3版が出る。1975年には日蘭学会が初版をベースにして、上記第2版、第3版の内容も取り入れた4つ目の復刻版である第4版を出している⁵²⁾。

『日本』において、相撲について述べられている箇所は3か所ある。1つは第2版の第1部第2章にある1826年に行われた江戸参府の様子を描いたところに見出せる。シーボルト一行は3月10日に曾根(現在の兵庫県高砂市)に至り、「曾根の松」、「石の宝殿」、「高砂の寺」を訪問した。そのさい一行は、「ある相撲取もしくは相撲(Ringkämpfer oder Sumō)が、オランダ人たちにいつも開いている」⁵³⁾ささやかな酒宴に招待された。シーボルトは、この相撲取が、その三か月前に長崎に来て、やはり会食を開いてくれたこと、その後、火事で財産を失って貧しくなってしまう

たにもかかわらず、ここでもできる限りのことをしてくれたことを述べ、感謝している⁵⁴⁾。また、3つの寺のうち一つしか訪問せず、この相撲取の酒宴にも参加しなかったオランダ大使に対して不満をもらしている。

次に相撲に関連する表現が見られるのが、第2版の第5部第2章にある日本の神事について書かれた「宗教」においてである。日本の年祭りが説明される中で、祭りの期間中には実に様々な「祭典や娯楽」が行われると述べられた後、「祭りの行列、合唱、無言劇風の踊り、仮装、芝居、イルミネーション、競馬、弓術、相撲（Ringkämpfe）その他の身体の運動が、英雄をたたえる歌、冒険物語の朗読、富くじ、食事や酒宴と代わる代わる行われる」⁵⁵⁾と説明される。ここに出て来る「相撲」は、祭りの最中に行われる相撲なので、なんらかの格闘ではなく、奉納相撲を指していると思われるのが適当だと思われる。またここでは競馬や弓術という、相撲以外の日本の伝統スポーツも言及されているのが見られる。

3つ目の相撲に関連する記述は、先の2か所と比べてかなり長い。第2版の第2部「民族と国家」の第3章「武器、武術、戦術について」の中、「武器について」の節において、最後に「日本島の先住民の石器武器への一瞥」という項目が書かれている。これは途中で中断してしまっているが、トラウト版（第3版）ではその続きの部分がシーボルトの草稿の写しによって補われており、その後に出た日蘭学会版（第4版）でもそれは踏襲され、補遺として出された巻に掲載された⁵⁶⁾。その続きとは、「日本島の先住民の石器武器への一瞥」の最後の段落と、「武術、戦術について」である。章のタイトル「武器、武術、戦術について」から考えると、「武術、戦術について」は先におかれた「武器について」と並ぶ節である。そのなかの「軍旗と職標の旗」の項目に相撲が詳しく説明されているのを確認できる。これは長い叙述なので、以下分割して見ていきたい。

軍隊について述べる場合、専門の格闘家

（Ringer）（相撲（Sumo））という特別な階級を生み出した相撲（Ringkämpfe）についてもふれなければならない。この格闘（Ringen）は日本の原民族の男の戦争の風習である。すでに寓話風の伝説のなかにも、相撲（Ringkämpfe）で優劣を競った神々が言及されている。紀元前29年から紀元後70年までに統治した垂仁天皇の時代の最古の歴史も相撲取たちのことにふれており、それによると、天皇はケジュカ（Kejuka）という有名な農夫を宮廷に招き、同じように有名でがっしりした武人であるスクネ（Sukune）と相撲で優劣を競わせた。このとき、スクネはこの農夫を非常に強い力で地面に投げたため、ケジュカの背骨は折れ、死んでしまったという。この時から相撲（Ringkämpfe）は武士の訓練にも、また民衆の祭りにも導入された。⁵⁷⁾

シーボルトは相撲を説明するにあたって、まず相撲の起源について語っている。二つ挙げた起源のうちの最初の一つは、神々が互いに優劣を競ったことを伝える伝説というから、これはおそらく『古事記』に見られるいわゆる国譲りの神話を指していると思われる。国譲りの神話では、天照大神が葦原中国を自分の子に統治させるため、そこを支配している大国主神に使者を次々と遣わし、最後に派遣した建御雷神タケミカヅチノカミが大国主神の息子である建御名方神タケミナカタノカミと手をつかみ合って力比べをし、それに勝利して国を譲られる。なお、建御名方神は、勝負に負けると、信濃の国の諏訪に逃げて命乞いをするが、ここで祀られ諏訪社ができたとされている。この説話は相撲の起原説話の一つとして良く知られていることから⁵⁸⁾、シーボルトはこれを念頭に書いていると考えられる。

シーボルトが挙げているもう一つの起原説話は、名前の表記が正確ではないものの、『日本書紀』に見られる野見宿禰ノミノスクネと当麻蹶速タイマノケハヤの決闘の話であろう。それはこのような話である。垂仁天皇の時代、7月7日に当麻村に当麻蹶速という強い男がいるという報告があり、帝は臣下にこの人物にかなうものがないかと尋ねた。するとその場にいた一人

が、出雲に野見宿禰という勇士がいると発言し、二人に力比べをさせることにした。相対した二人は蹴り合って戦い、しまいに宿禰は蹶速の腰骨を折って殺してしまった。シーボルトはこの話を挙げる際に宿禰が蹶速を「投げた」と説明しているが、もととなる説話では蹴り合って戦っている点が異なる⁵⁹⁾。しかし、いずれにせよ、現代では基本的な相撲の起原説話として知られる二つの説話を⁶⁰⁾、シーボルトも相撲の起源を説明するために採用していることがわかる。そしてこの二つの話を紹介したあと、相撲が武士のたしなみになったこと、庶民の間では祭りの中で催される身近なものになったことを述べている。このように、ここではシーボルトが相撲の歴史を簡潔にまとめているのが見て取れる。

さて、先の引用に続く部分では、相撲取の戦時での役割と体格の話に移る。

相撲取には兵士としての階級があり、戦時には先陣を務め、そのさいには彼らの尋常ならざる大きさと重さ、そして強さが役立ち、勇猛な姿を見せるのである。歴史上では有名な相撲取（Ringer）がいるが、その中にタニカサ（Tanikasa）という者がいる。その者は今世紀の初めに活躍し、申し立てによると370斤、すなわち218キロあったという。さらにサカガ（Sakaga）という者がいるが、彼は8尺、すなわち3.032メートルあったと言われている。私自身、そのような競技者（Athleten）と個人的に知り合いであったが、私はちょうど彼の腕のところまでの大きさであった。⁶¹⁾

ここではまず、相撲取の戦時での役割が述べられる。ここで述べられている相撲取は、大名の「抱え相撲」のことであろう。戦国時代以降、優れた相撲取は大名に抱えられ、諸藩で武芸の振興に貢献をした⁶²⁾。彼らは戦時には戦場に赴いて、ここで述べられているような活躍をしたと考えられるが、シーボルトが滞在した19世紀初めは、江戸の太平の世の中であったので、実際には相撲取が戦

場に出ることはなかったと思われる。江戸時代の後期までに、全体のおよそ1割の大名が相撲取を抱えていたが⁶³⁾、これは主として大名の趣味として行っていたのである。

次に「タニカサ」（Tanikasa）と「サカガ」（Sakaga）という2人の相撲取の名前に注目してみよう。第4版のこの部分を翻訳した中井晶夫は、前者を「谷風」後者を「シヤカガタケ釈迦岳」としている⁶⁴⁾。谷風は天明から寛政期に江戸を本拠にして活躍した2代目谷風梶之助のことであろう。谷風は上方で活躍した小野川喜三郎とともに、寛政元年（1789年）に富岡八幡宮の興業で初めて横綱披露を行った相撲取である⁶⁵⁾。谷風の体重は43貫と言われているから⁶⁶⁾、約161キロとなり、シーボルトが得た情報は誇張されているように思われる。もう一人は明和期に上方で活躍したシヤカガタケクモエモン釈迦ヶ嶽雲右衛門、大関釈迦ヶ嶽を指すと思われる。釈迦ヶ嶽は巨人力士で知られ、身長7尺余りで、豆腐屋の二階の戸を叩いたという逸話がある⁶⁷⁾。7尺は約212cmであり、別の資料でも身の丈7尺1寸6分（217.4cm）とあるが⁶⁸⁾、いずれにせよシーボルトはここでも相当誇張された情報を得ていたと考えられる。

次に相撲取の国との関係について説明がされている。

相撲取（Ringer）たちは例外なく公的には御所様、つまり天皇の宮廷の役人の命令下にあり、諸国の相撲取（Ringer）を直ちに召集するよう、この上官からの動員がかかると、大名たちはそれを実行すべく義務づけられていると主張している人がいるが、それはほとんど考えられないことである。というのはこのことは、将軍の政策と立場とは相いれないものだからである。それゆえむしろ一種の名誉職ということなのだろう。⁶⁹⁾

第2章第1節で述べたように、平安期においては天皇が相撲を観覧し、宴を催す相撲節が年中行事として行われたが、そのさい、その頃は相撲人と呼ばれた相撲を生業としている者たちが、天皇の勅

令によって諸国から召集された⁷⁰⁾。これは、シーボルトがここで書いている内容と似通っているように思われる。しかし相撲節は12世紀に廃絶しており、シーボルトが滞在した時代にはすでに存在していない。また、江戸期に全国の大名が召し抱えている相撲取が召集される事例としては、将軍が江戸城内で相撲を見物する上覧相撲があったが⁷¹⁾、シーボルトが伝え聞いたのは天皇に命令による召集であるから、これも違うように思われる。仔細はわからないが、シーボルトが言うように、江戸時代にはこの「上官」は、名誉職として形式上は存在はしていたということなのか、もしくはシーボルトは相撲節について聞いた話を、同時代の話と取り違えたというあたりが真相であろうか。

相撲について述べた最後の部分においては、相撲の組織と技について述べられている。

大阪には相撲取（Ringer）のための専門の学校がある。そこで彼らは専門的な技を修得し、熟達具合に応じて位を与えられる。それには4つの序列があり、最下位の序列には48の組み手が与えられている。同種のものを用いるのは、相撲階級の特権を持つメンバーだけである。下級武士たちも同種のことを学ぶが、その場合、上述の組み手を用いるのではなく、特別な流派、いわゆる柔術（Juzutsu）、柔らかい組手と呼ばれるものがある。⁷²⁾

大阪にある相撲専門の学校（Schule）が何を指すのかは判然としない。近世において相撲の正当なあり方としての内外の作法を指示するものを「故実」といい、それが力士に伝承されることで、その伝承を受けた正当な相撲と、伝承を受けなかった、正当ではない相撲が区別されていった⁷³⁾。その故実は行司が伝承し、「部屋」という単位において年寄を通じて力士に伝承された。この仕組みのもとでは、相撲取になるには年寄に弟子入りをする必要がある。この師弟関係のもとで運営さ

れる「宿所稽古場」がその後の相撲部屋の原型であるが⁷⁴⁾、この宿所稽古場は18世紀以降に本場所興行の拠点となった江戸、大阪、京都の三都に成立している。シーボルトが述べているのは、このうちの大阪の宿所稽古場のことだろうか。

また、「序列」については、すでに相撲節においてもその強さに応じて相撲取の地位を示す序列はあったものの、現在のような地位の呼称は江戸時代の勸進相撲興行に成立したものである。具体的には、17世紀後半より見られる番付表の発展と並行して、18世紀前半には大関、関脇、小結、前頭の4つの呼称が定着したというから⁷⁵⁾、このシーボルトの言う「4つの序列」とはこれを指すものと推測される⁷⁶⁾。

「48の組手（Handgriffe）」は、いわゆる「48手」を指すのだろう。48手は相撲の技を列挙したもので、相撲の技の名称そのものはすでに平安時代に見られるが⁷⁷⁾、48手の原型となるものは鎌倉時代中期以降に現れる。そして、現在に見られる相撲の決まり手を指すものの原型は江戸期の18世紀に定着していく⁷⁸⁾。しかし、その後シーボルトが書いている「最下位の序列には48の組み手が与えられている」は、4つの序列の最下位（である前頭）は、48手しか教えてもらえないということであろうか。相撲の48手というのは、決まり手の総数が48しかないという意味ではなく、元来は単に多いという意味で「48」が使われており、江戸期に入ると48できれいにまとめられていた時もあったが、最終的には48よりかなり増えている⁷⁹⁾。資料によって異なるが、例えば、228手を紹介する資料もある⁸⁰⁾。そのことから考えると、序列の最下位では、その最も基本的な48手しか学べないという意味なのだろうか。その点は判然としない。また、その後書かれている「相撲階級の特権を持ったメンバー」も何を指すのかは不明である。文字通り読むならば、大阪の専門の学校で学んだ場合、最下位である前頭であっても、48手を身に着けることが許されると解釈できる。

最後の部分では、下級武士たちも組み手を習うが、それは柔術だと述べられている。シーボルトは別のところで「下級武士」(Soldaten)のことを将軍のもとで働くものを「同心」(Tozin)、大名のもとで働く場合は「足軽」(Assigaru)と述べているから⁸¹⁾、ここで言う下級武士(Soldaten)も、与力の元で町の警備や見回りを行った同心や足軽を指していると思われる。この項目に関連づけられたと思われる図版を見ると、相撲の様子が描かれた3つの図の下に、同心もしくは足軽らしき下級武士が柔術を使って相手を無害化し、拘束する様子が描かれているのを見ることができる(図2)。

本引用部分全体から見てみると、相撲の起源、普及の程度、戦時での活躍、体格、支配者及び為政者との関係、団体組織、特殊技術など、多岐の事柄について簡潔にまとめられているのがわかる。また付された図版によって、視覚的にもその様子が明らかにされている。

その語りにおいては、相撲取と背比べをした個人的なエピソードが語られるものの、そのような個人的、主観的な内容はごく一部に現れるにすぎない。それよりも事典の記述のように、多くの事実が淡々と客観的に語られているように見える。とはいえ、その事実の中には、江戸期において勸進相撲が庶民のあいだで熱狂的な人気を誇ったことや、相撲とそれを取り巻く文化の華やかさなどは含まれていない。本テキストが「武術と戦術について」の中に含まれていること、加えて最後に引用した技術を説明する部分から見ると、シーボルトは相撲を日本の武術のひとつとして位置付けていることがわかる。従って、武器や軍隊、その訓練などと並ぶ日本の軍事力の一部として、相撲を見ようとしていると言えるのではないだろうか。

4. おわりに

本論においては、江戸期の鎖国時代に相撲に接した3人の西洋人の記録から、それぞれの相撲体験について分析を試みられた。

モンターヌスについては、まず、伝聞による情



図2 シーボルト『日本』挿絵「相撲取」
(福岡県立図書館所蔵)

報から異国の事物を再現する困難さについてみる事ができた。自身が見たことのない異国の固有の格闘競技を、他人の資料を用いながら再構成するとき、想像力によって対象の様子が捕われるので、不正確さが生じ、また、現代的な視点から見るとある種の奇抜さがみられるようになる。しかしながら、モンターヌス自身はそのような奇抜さに固執するのではなく、そこから他民族の格闘競技へと目を移しながら、日本固有の相撲を相対化し、西洋社会の軍事教練一般の問題へとテーマを拡大しているのを確認できた。日本の相撲は、自文化を映す鏡のようなものとして機能していたのではないだろうか。

ケンペルについては、滞在中に船漕ぎの競争、三十三間堂の通し矢など日本の伝統スポーツを見学したことなどを見た。相撲にかんしてはショイヒツァーが自身の『日本誌』の挿絵のために作成したと言われる下絵にある相撲取の図版や、当時長崎で行われていた諏訪祭りの様子、ケンペル一行が京都見学を行ったこと、そしてケンペルがカ

ンプハウスから多くの資料を得たことなどの事実を確認した。そのことからケンペルが少なくとも相撲を十分見聞きすることはできたと言えるのではないかということ述べた。今後の研究においては、例えばそのショイヒツァーの下絵があるスローンコレクションの5232番資料を直接確認することなどが必要であろう。

最後に見たシーボルトは、相撲について多くの記録を残していた。そのうちの一つはシーボルトの個人的な交流から、当時の一相撲取の様子が垣間見えるものであった。最も長く書かれた部分においては、相撲の起源の説明から始まり、社会的な位置づけ、体格やその技の種類など包括的に説明がなされているのを見ることができた。相撲の学校など、一部の内容についてはそれが正確な内容なのか不正確な内容なのか、判断をしかねるところもあるが、総じてかなり詳しい相撲の情報が示されていたと言えるだろう。しかし、それほど詳しい内容であるにもかかわらず、江戸の庶民の娯楽として人気を博した江戸の一文化としての相撲の姿は、この長い記述からは見えてこなかった。相撲は確かに江戸の文化の一部ではあるが、ここでは「武術」の項目に取り上げられているため、あくまでも日本の武術の中の一端として整理され、記録されていたと言えるだろう。

これら3者の相撲体験から見えてくるのは、彼らがそれぞれに接した相撲の様相であり、それを言語化していく手つきである。他方、そのような個々の表現の特性は見えて来たものの、そうした相撲と接した体験を通じて、彼らは日本をどのようなものとして捉えたのかということまでは明らかではない。相撲について書かれた西洋人の旅行の記録は多く、例えばペリーや幕末に訪れたオレンブルク一行の記録や、珍しいところでは、女流ジャーナリストのアリス・シャレックといった人も相撲については記録を残している。今後はそのような記録を網羅的に収集し、整理していく必要があるだろう。そうした作業のなかで、西洋人が相撲を通じてどのように日本を見たのかという問題が明らかになっていくと思われる。

なお、この問題を異文化とスポーツという枠組みで見た場合、これまでスポーツにかんする様々な学問領域において、多様な研究方法や視点から、この問題にはアプローチされてきた。しかしながら、ある人物が体験した異文化のスポーツ、もしくはスポーツを通じて生じた異文化体験を分析する方法について見てみると、心理学分野においては口述記録の分析方法は質的研究の有効性が主張され、その手法が整備されつつある一方で、書かれた体験の記録、いわゆる「ライフヒストリー資料」の分析については、未だ不十分であるといえる⁸²⁾。本論は、旅行記や旅行を通じて残された資料といった書かれた体験の記録から、この問題に一考を与えることを目論んだものでもある。いわば異国スポーツを語る言葉について検討することが意図されているが、これは言い換えると「異国スポーツの詩学」という問題を扱っているとも言える。今後は包括的な研究を通じて、この問題を明らかにしていきたいと考えている。

注

- 1) 一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構編『スポーツツーリズム・ハンドブック』学芸出版社、2015年、12-15頁。
- 2) スポーツ社会学においては、スポーツとグローバル化の問題にかんする研究は1990年代から見られるようになった。例えばベールとマグワイアの以下の研究を見よ。John Bale and Joseph Maguire (ed.), *The Global Sports Arena, Athletic Talent Migration in an Interdependent World*, London, Frank Cass, 1994.
- 3) 拙論「スポーツを語ることば：スポーツを通じた異文化体験研究のための予備的考察」『駿河台大学論叢』第54号、2017年、55頁。
- 4) 西洋由来の「近代スポーツ」が導入される以前から存在した日本固有の武術や競技、格闘技、身体文化について、本論ではアレン・グットマンの表現にならない「伝統スポーツ」と呼ぶこと

- にする。アレン・グットマン『スポーツと帝国—近代スポーツと文化帝国主義』, 谷川稔他訳, 平凡社, 1997年, 例えば181頁。
- 5) Basil Hall Chamberlain, *Things Japanese, Being Notes on Various Subjects Connected with Japan, For the Use of Travellers and Others*, Second Edition Revised and Enlarged, London, Kegan Paul, Trench, Trübner & Co., 1891, p. 464. 翻訳は以下の第6版のものがある。バジル・ホール・チェンバレン『日本事物誌』第2巻, 高梨健吉訳, 平凡社, 1969年(東洋文庫147), 308頁。
- 6) 朝鮮通信使の日本の伝統スポーツへの言及はこれからの研究を待たねばならぬが, 例えば以下の文献においては, 「柔術」についての言及が見られる。『海遊録 朝鮮通信使の日本紀行』, 姜在彦訳注, 平凡社, 1974年, 121頁。
- 7) 新田一郎『相撲の歴史』山川出版社, 1994年。土屋喜敬『ものと人間の文化史179 相撲』法政大学出版局, 2017年。
- 8) 新田, 前掲書, 50頁。
- 9) 同上書, 170頁。
- 10) フレデリック・クレインス『十七世紀のオランダ人が見た日本』臨川書店, 2010年, 66頁。
- 11) 『邦訳 日葡辞書』, 土井忠生, 森田武, 長南実編訳, 岩波書店, 1980年, 588頁。なお, 同じく競技的性格を持つ身体活動の項目として“Yabusame”(流鏑馬)という用語が見られる(805頁)。
- 12) クレインス, 前掲書, 66頁。
- 13) リンスホーテン『東方案内記 大航海時代叢書VIII』, 岩生成一他訳, 岩波書店, 1968年, 249-287頁。
- 14) クレインス, 前掲書, 109頁。
- 15) 相撲に関わる用語ではないが, ロジャー・マンレイによる英語版においては, 江戸城にある皇帝の「宮殿」を説明する部分において, 以下のように“sport”の語が確認できる。“it is great, and consisteth of several dwellings beautified with Woods, to the envy of Nature, full of Ponds, Rivers, Gardens, Plains, Courts, places to Pickeer and sport in...” (François Caron, *A True Description of the Mighty Kingdoms of Japan and Siam*, London, 1671, p. 17). これを訳すと「〔皇帝の宮殿は一訳者注〕大きく, 木々で飾られたいくつかの居住区から成り, それは自然もうらやむほどで, 池や川, 庭, 平原, 中庭, 採取やスポーツをする場所など多くあり(…)」となる。阿部生雄によると, 17世紀の名詞“sport”は「気晴らし」の意味で用いられたとされる(阿部生雄「辞書に見る“スポーツ”概念の日本的受容」, 中村敏雄編『スポーツ文化論シリーズ⑤ 外来スポーツの理解と普及』創文企画, 1995年, 14頁)。従って, ここで動詞として用いられている“sport”が含まれた表現は, 「気晴らしをする場所」というような意味ではないかと思われる。なお, オランダ語原書ではこの“sport”にあたる箇所は“Tupnen”と読めるように思われるが, 判別し難い(François Caron: *Rechte Beschryvinge van het Machtigh Koninkrijk van Iappan, bestaende in verscheyde Vragen, betreffende des selfs Regiering, Coophandel maniere van Leven, strenge Justitie & c. voorgesteld door den Heer Philips Lucas, Direkteur wegens den Nederlandsen Staet in India, ende door de Heer Francoys Caron, President over de Comp, ommevlach in Iappan, beantwoort in den Iare 1636.* 's Gravenhage: Iohannes Tongerloo 1661, S. 12.). また, ドイツ語版では“Lustgärten”とあり, これは「遊歩庭園」を指す言葉である(François Caron: *Wahrhaftige Beschreibungen dreyer mächtigen Königreiche Japan, Siam und Corea: Benebenst noch vielen andern, im Vorbericht vermeldten Sachen: Denen noch beygefüget Johann Jacob Merkleins, von Winsheim. Ost-Indianische Reise welche er im Jahre 1644 löblich angenommen / und im Jahre 1653 glücklich vollendet. Samt einem nothwendigen Register.*

- Nürnberg: Endter 1672, S. 17)。なお、幸田成友によるオランダ語版をもとにした日本語版では「動物園」と訳されている(フランソワ・カロン『日本大王国志』, 幸田成友訳, 平凡社, 1967年(東洋文庫90), 116頁)。
- 16) Arnoldus Montanus: Gedenkwaerdige Gesantschappen der Oost-Indische Maetschappy in't Vereenigde Nederland, aen de Kaisaren van Japan. Amsterdam: Jacob Meurs 1669.
- 17) クレインス, 前掲書, 150頁。
- 18) Arnoldus Montanus, *Atlas Japannensis: Being Remarkable Addresses by Way of Embassy from the East-India Company of the United Provinces, Emperor of Japan*, London, 1670, p. 295.
- モンターヌスの引用にあたっては, 基本的には上記のジョン・オギルビーによる英語版を用い, 筆者自身が翻訳した。そのさい原書であるオランダ語版を参照し (Montanus, a. a. O., S. 267.), 併せて和田萬吉による日本語訳も参考にした(『モンターヌス 日本誌』, 和田萬吉訳, 丙午出版, 1925年)。
- 19) 土屋, 前掲書, 142-148頁。
- 20) 同上書, 145頁。
- 21) なお, モンターヌスが参照したフリシウスらの記録にかんして, フリシウスらが見学したのは京都で興行された勸進相撲であったと推定される。というのは, 江戸時代に日本を訪れたオランダ人使節団は, 出島から出ることを禁じられ, 普段の生活も幕府に厳しく監視されていたものの, 江戸参府の帰りに京都に立ち寄ったとき, 京都観光のために一時的ではあるが, 比較的自由に街を見物することが許されていたからである。京周辺は中世末期に相撲の「最大のマーケット」であったため(新田, 前掲書, 182頁。), 相撲を見る機会があったと思われる。ただし正保2年(1645年)から元禄年間(1688-1704年)までの間, 京においては勸進相撲の記録は無いという報告もあるので(同上書, 183-185頁), 確実に見たということは言うことはできない。また, 別の可能性として, 西洋人が長崎で行われた諏訪祭において行われた奉納相撲を見た可能性がある。諏訪祭については, 第3章第2節のケンペルの論考において触れたので参照されたい。
- 22) 例えば, その種の著作として宮田珠己のものが挙げられる。宮田珠己『おかしなジパング図版帖 —モンターヌスが描いた驚異の王国—』バイインターナショナル, 2013年。
- 23) クレインス, 前掲書, 157頁。
- 24) Montanus, *Atlas Japannensis*, op. cit., pp. 295-296.
- 25) Ibid., p. 296.
- 26) Ibid., p. 194.
- 27) 『廻国奇観』についてはボダルト=ベイリーが詳しい。ベアトリス・M・ボダルト=ベイリー『ケンペル —礼節の国に来たりて—』ミネルヴァ書房, 2009年, 242-256頁。
- 28) Engelbert Kaempfer, *The History of Japan, together with a Description of the Kingdom of Siam* (Translated by J. G. Scheuchzer), reprint, Glasgow, James MacLehose & Sons, 3 vols, 1906 [Orig., London, 1727].
- 29) Engelbert Kaempfer: *Geschichte und Beschreibung von Japan*. Hrsg. v. Christian Wilhelm Dohm. 2 Bde. Lemgo: Verlag der Meyerschen Buchhandlung 1777-1779. [エンゲルベルト・ケンペル『日本誌 —日本の歴史と紀行—』上下巻, 今井正訳, 霞ヶ関出版, 1973-1974年。但し今井の翻訳は以下のハンノー・ベックによる序文が入った新版を用いている。Engelbert Kaempfer: *Geschichte und Beschreibung von Japan*. Hrsg. v. Christian Wilhelm Dohm. 2 Bde. Unveränderter Neudruck mit einer Einführung von Hanno Beck. Stuttgart: F. A. Brockhaus 1964.
- 30) ショイヒツァーの翻訳とケンペルの手稿の違いについてはボダルト=ベイリーの以下の論文

- を特に参照せよ。Beatrice M. Bodart-Bailey, “Kaempfer Restor’d” in *Monumenta Nipponica*, Vol. 43, No. 1, 1988, pp. 1-33.
- 31) ケンペルの手稿とコレクションの死後のいきさつと、『日本誌』出版の経緯については先のボダルト＝ベイリーに加え、マサレラを参照せよ。同上書、256-267頁、及び Derek Massarella, “The History of *The History*: The Purchase and Publication of Kaempfer’s History of Japan”, in Beatrice M. Bodart-Bailey and Derek Massarella (ed.), *The Furthest Goal. Engelbert Kaempfer’s Encounter with Tokugawa Japan*, London and New York, 2016, pp. 96-131. [Orig., New York: Japan Library, 1995] [デレク・マサレラ『『日本誌』史 —ケンペル『日本誌』原稿の購入と出版』, ベアトリス・M・ボダルト＝ベイリー、デレク・マサレラ編『遙かなる目的地 ケンペルと徳川日本の出会い』、中直一、小林早百合訳、大阪大学出版会、1999年、139-190頁]。
- 32) Engelbert Kaempfer: Heutiges Japan. Hrsg. v. Wolfgang Michael und Barend J. Terwiel. München: Iudicium 2001 (Engelbert Kaempfer: Werke. Kritische Ausgabe in Einzelbänden. Bd. 1.).
- 33) Kaempfer: Heutiges Japan, Bd. 1. a. a. 0., S. 455.
- 34) Ebd., S. 491. その他にもシヨイヒツァー版では鷹狩を指して“sport”という言葉をあてている箇所が見られる (Kaempfer, *The History of Japan*, vol. 2, op. cit., p.208)。
- 35) Ebd., S. 226. ちなみに、この部分はシヨイヒツァー版では「彼らは皆優れた格闘家 (wrestlers) であり」とある (Kaempfer, *The History of Japan*, op. cit., vol. 2, p. 108)。また、ドーム版では「彼らは格闘術 (Ringekunst) によく熟達している」となっている (Kaempfer: *Geschichte und Beschreibung von Japan*, a. a. 0., Bd. 2, S. 27)。ドーム版をもとにした今井正の翻訳では「彼らは逮捕術に長け」とある (ケンペル, 前掲書, 下巻, 34頁)。
- 36) Gerhard Bonn: Der wissenschaftliche Nachlass des lippischen Forschungsreisenden Engelbert Kaempfer im Britischen Museum. In: Lippische Mitteilungen aus Geschichte und Landeskunde. 48. Bd. Detmold: Meyersche Hofbuchhandlung Verlag 1979, S. 69-116, hier S. 98.
- 37) Ebd..
- 38) Jörg Schmeißer, “Changing the Image: The Drawings and Prints in Kaempfer’s *History of Japan*”, in Bodart-Bailey and Massarella (ed.), *The Furthest Goal*, op. cit., p. 184 [ヨルク・シュマイサー「イメージの変貌 —ケンペルの『日本誌』に見られる挿絵と版画—」, ボダルト＝ベイリー, マサレラ編『遙かなる目的地』, 前掲書, 248頁 (注35)]。またユーイン・ブラウンの以下の資料も参照せよ。ユーイン・ブラウン「大英図書館所蔵ケンペル将来日本資料の意義」, ドイツー日本研究所編『ドイツ人の見た元禄時代 ケンペル展』カタログ, サントリー美術館, 1990年, 107-108頁。
- 39) Beatrice M. Bodart-Bailey, “Kaempfer Restor’d”, op. cit., p. 28. なお, ボダルト＝ベイリーは, ケンプファーがこれら約60の下絵が『今日の日本』のどこに配置されるべきかということを示していたとしているが (Ibid.), ヴォルフガング・ミヒャエルはその配置の指示がケンプファーの手によるものか疑わしいとしている (Kaempfer: Heutiges Japan. Bd. 2. a. a. 0., S. 48-52)。
- 40) このあたりの経緯についてはボダルト＝ベイリーに加え (Bodart-Bailey, “Kaempfer Restor’d”, op. cit.), シュマイサーも参照せよ (Schmeißer, “Changing the Image”, op. cit.)。また, ケンペルが日本から持ち帰った図版資料から, シヨイヒツァーが新たに絵を描き起こしたその具体的手つきについては, 以

- 下のボダルト＝ベイリーの『名所絵』（諸国名所図解）（これはスローンコレクションの5252番に所蔵されている）の改編の分析に見ることができる。Beatrice M. Bodart-Bailey, “The Most Magnificent Monastery and Other Famous Sights: The Japanese Paintings of Engelbert Kaempfer”, in *Japan Review*, 1992, pp. 25-44.
- 41) Kaempfer: Heutiges Japan. Bd. 1, a. a. 0., S. 501-752. ただし、裸の男性を描いた「前と後ろから見た男性の様子」というスケッチがあり（Ebd., S. 585, Abb. 36），この絵では、男性の腰の部分にうっすらと禪のようなものが描かれており、これがシュマイサーの5232番資料に含まれた時に相撲取と見なされ、そのようにラベリングされた可能性は全くないとは言えない。なお、ヴォルフガング・ミヒャエルはこの絵は鍼灸のために用いられる人体図だとしている（Kaempfer: Heutiges Japan. Bd. 2, a. a. 0., S. 51.）。
- 42) 『ドイツ人の見た元禄時代』カタログ，前掲書，80-81頁及び158頁。
- 43) Kaempfer: Heutiges Japan. Bd. 2, a. a. 0., S. 48.
- 44) Kaempfer: Heutiges Japan. Bd. 1, a. a. 0., S. 238-244.
- 45) ケンペルの著作に果たしたカンプハウスの貢献については以下を参照。Beatrice M. Bodart-Bailey, “Writing The History of Japan”, in Bodart-Bailey and Massarella (ed.), *The Furthest Goal*, op. cit., pp. 17-43. [Orig., New York: Japan Library, 1995] [ベアトリス・M・ボダルト＝ベイリー「『日本誌』を書いたのは誰か」、ボダルト＝ベイリー、マサレラ編『遙かなる目的地』，前掲書，23-63頁]。
- 46) シーボルトの収集した各種資料については以下を参照。ヨーゼフ・クライナー『黄昏のトクガワ・ジャパン シーボルト父子の見た日本』NHKブックス，1998年，15-16頁。
- 47) 日獨文化協會編『シーボルト研究』岩波書店，1938年，86-87頁。
- 48) 小林淳一編著『江戸時代 人物画帳 シーボルトのお抱え絵師・川原慶賀の描いた庶民の姿』朝日新聞出版，2016年，199-202頁。他には，ブランデンシュタイン＝ツェッペリン家が所蔵しているとされている「力士と空手家」（Ringer und Faustkämpfer）と呼ばれる草稿がある。筆者は直接この資料を確認していないが，国立歴史民俗学博物館が運営する「データベースれきはく1」に含まれる「シーボルト父子関係資料データベース」でその存在を確認することができる。「力士と空手家」『シーボルト父子関係資料データベース』 < https://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/getdocrd.pl?tn=1&ti=5703&h=/history/w11510146443_9025&ch=2&p=param/pfvs/db_param&o=1&k=50&l=&sf=0&so=>（2017年11月8日参照）。
- 49) 宮崎克則『シーボルト『NIPPON』の書誌学的研究』花乱社，2017年，9-19頁。
- 50) 同上書，9頁。
- 51) Philipp Franz von Balthasar Siebold: Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern Jezo mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Liukiu-Inseln. von Ph. Fr. von Siebold. Hrsg. v. seinen Söhnen. 2 Bde. Würzburg; Leipzig: Verlag der K. U. K. Hofbuchhandlung von Leo Woerl 1897.（以下Nippon. Hrsg. v. seinen Söhnenと略記）なお，本書の第2章，1826年に行われた江戸参府については以下の翻訳がある。ジーボルト『江戸参府紀行』，斎藤信訳，平凡社，1967年（東洋文庫87）。
- 52) 本論では『日本』の引用は，第2版から訳出をしている。翻訳は筆者によるものであるが，そのさい先の東洋文庫版はもとより，第4版の翻訳も参考にした。なお，第2版に掲載されていない「軍旗と職標の旗」については，この第4版を利用した。第4版とその翻訳は以下の通りである。Philipp Franz von Balthasar

- Siebold: Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan. Vollständiger Neudruck der Urausgabe zur Erinnerung an Philipp Franz von Siebolds erstes Wirken in Japan 1823 - 1830. In zwei Text- und zwei Tafelbänden mit einem Ergänzungsband. Hrsg. v. Japanisch - Holländischen Institut. Tokyo: Kodansha 1975. (以下 Nippon. Hrsg. v. Japanisch - Holländischen Institut と略記) [フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト『日本—日本とその隣国, 保護国—蝦夷・南千島列島・樺太・朝鮮・琉球列島—の記録集。日本とヨーロッパの文章および自己の観察による。』全9巻, 岩生成一監修, 斎藤信図版監修, 中井晶夫, 斎藤信, 金本正之, 妹尾守雄, 末木文美仕, 石山禎一, 尾崎賢治, 加藤九祚, 八城園衛訳, 雄松堂出版, 1977-1979年]。
- 53) Siebold: Nippon. Hrsg. v. seinen Söhnen, erster Bd., S. 153.
- 54) Ebd..
- 55) Siebold: Nippon. Hrsg. v. seinen Söhnen, zweiter Bd., S. 102.
- 56) シーボルト『日本』図録第2巻, 前掲書, 27頁(原注66)及び29-30頁(訳注56)を参照せよ。
- 57) 本引用については, 以下の第4版より訳出した。Siebold: Nippon. Hrsg. v. Japanisch - Holländischen Institut, Ergänzungsband, S. E-50 [シーボルト『日本』図録第2巻, 前掲書, 33頁]。
- 58) 長谷川明『相撲の誕生』新潮社, 1993年(新潮選書), 16-20頁。
- 59) 宿禰と蹶速の勝負が, 国譲り神話のように相撲を彷彿させる組み合わせではなく, 蹴り合っていることについての考察は, 長谷川を参照せよ。同上書, 25-26頁。
- 60) 同上書, 15頁。
- 61) Siebold: Nippon. Hrsg. v. Japanisch - Holländischen Institut, Ergänzungsband, S. E-50 [シーボルト『日本』図録第2巻, 前掲書, 33頁]。
- 62) 土屋, 前掲書, 62-68頁。
- 63) 同上書, 65頁。
- 64) シーボルト『日本』図録第2巻, 前掲書, 33頁。
- 65) 土屋, 前掲書, 157-158頁。新田一郎『相撲その歴史と技法』ベースボールマガジン社, 2016年, 102頁及び138-139頁。
- 66) 三木貞一『江戸時代の角力』近世日本文化史研究会, 1928年, 253頁。
- 67) 同上書, 216頁。
- 68) 島根県立古代出雲歴史博物館編『どすこい出雲と相撲』ハーベスト出版, 2009年, 132頁。
- 69) Siebold: Nippon. Hrsg. v. Japanisch - Holländischen Institut, Ergänzungsband, S. E-50-51 [シーボルト『日本』図録第2巻, 前掲書, 33頁]。
- 70) 飯田道夫『相撲節会 大相撲の源流』人文書院, 2004年, 120頁, 及び, 新田, 『相撲の歴史』, 前掲書, 72-103頁。
- 71) 新田, 『相撲の歴史』, 前掲書, 210-218頁。
- 72) Siebold: Nippon. Hrsg. v. Japanisch - Holländischen Institut, Ergänzungsband, S. E-51 [シーボルト『日本』図録第2巻, 前掲書, 33頁]。
- 73) 新田, 『相撲 その歴史と技法』, 前掲書, 136-144頁。
- 74) 土屋, 前掲書, 91頁。
- 75) 同上書, 181頁。
- 76) 翻訳者の中井も訳注としてこの4つの呼称を訳文に補っている。シーボルト『日本』図録第2巻, 前掲書, 33頁。
- 77) 土屋, 前掲書, 83頁。
- 78) 新田, 『相撲 その歴史と技法』, 前掲書, 106-111頁。
- 79) 同上書, 同頁。
- 80) 土屋, 前掲書, 84頁。
- 81) Siebold: Nippon. Hrsg. v. Japanisch - Holländischen Institut, Ergänzungsband, S. E-48 [シーボルト『日本』図録第2巻, 前掲書,

31頁]。

82) スポーツ研究において異文化とスポーツを取り上げたこれまでの研究の概要と心理学研究における今後の研究の展望については以下を参照せよ。拙論，前掲書，特に68頁。

掲載図版出典

- 図1 モンターヌス『東インド会社遣日使節紀行』
挿絵 Arnoldus Montanus: Gedenkwaardige Gesantschappen der Oost-Indische Maetschappy in't Vereenigde Nederland, aen de Kaisaren van Japan. Amsterdam: Jacob Meurs 1669. 国際日本文化研究センター所蔵
- 図2 シーボルト『日本』挿絵「相撲取」Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzlandern : jezo mit den sudlichen Kurilen, Krafto, Koorai und den Liukiu- Inseln, nach japanischen und europaischen Schriften und eigenen Beobachtungen bearbeitet. 福岡県立図書館所蔵